

書評

勝俣 誠 著

『新・現代アフリカ入門 ——人々が変わる大陸』

岩波書店（岩波新書 1423）、2013 年 4 月刊、250 頁

A New Introduction to Contemporary Africa: A Continent Being Transformed by the People

Authored by Makoto Katsumata
Iwanami Shoten, April 2013, 250 pages

評 岡部 光明

慶應義塾大学名誉教授

Reviewed by Mitsuaki Okabe
Professor Emeritus, Keio University

Keywords : アフリカ、南北問題、ワシントン・コンセンサス、民主化

アフリカは、日本から距離的に最も遠いところに位置するだけでなく、平均的な日本人にとって意識面ないし知識面においても非常に希薄な地域ではないだろうか。例えば、「アフリカ」という言葉からまず連想するのは、黒人、極度の貧困、紛争、などである。

しかし、日本あるいは日本人としてアフリカという地域を的確に理解することの重要性は大きく、そして一層増している。なぜなら、まず何よりもアフリカの人口は約 10 億人であり、例えばヨーロッパの人口（約 7 億人）と比べてもその圧倒的な重みがそこにあるからだ。したがって、アフリカの動向は、それ自体が重要であるほか、日本を含む世界の政治や経済の将来像を規定する大きな要因の一つでもある。

本書は、国際政治経済学を専門とする一方、その

研究フィールドとしてアフリカに 40 年間通い続けている地域研究者でもある著者が、現代アフリカのエッセンスを伝えようとして執筆した入門書である。実は、著者は今から 22 年前に同様の視点に立つ書物『現代アフリカ入門』（勝俣、1991）を既に刊行している。今回の書物は、前書刊行以降のアフリカの激変ぶりが中心テーマとなっており、アフリカが国際的な政治経済のなかでいかに翻弄されてきたかを伝えようとするものである。

本書の最大の特徴は、分析枠組みにある。すなわち、ここではアフリカに関する各種のテーマあるいは地域を順次記述するのではなく、世界の富裕国である「北」に対してアフリカを「南」（著しい格差の下に人間の尊厳が収奪されて生きる地域）として位置づけ、両者の相互関係のなかで現代ア

フリカを描き出す方法を採用していることである。つまり、南北問題という視点に立ったアフリカ論といえる。

全体は8つの章からなる。第1章「所変われば品変わる」では、アフリカ大陸の地理的・文化的多様性の描写から始まり、近年における森林の喪失（砂漠化）の実情が述べられる。そしてその原因として未だ官僚制度を持つことのできないアフリカ諸国の実態があること、またアフリカこそ世界で最も地球環境に負担をかけていない地域であることなどが指摘される。そして、この地域は、地球環境を破壊せずに人々の生活向上を可能とする新しい地球文明のモデルを先進国と共同して提供する必要があること（北の成長モデルは環境的にも社会的にもそのままではアフリカの手本にならないこと）が強調され、そのための幾つかの試み（ノーベル平和賞受賞者マータイさんの植林促進運動など）が紹介されている。

これに続く4つの章は、現代アフリカの政治変動の要点が解説される。まず第2章「民主化の二〇年」では、1980年代末から90年代初頭にかけて押し寄せた政治面での民主化の動きが解説される。ベルリンの壁崩壊に歩調をあわせるがごとく見られたアフリカ民主化の波（権威主義体制から複数政党制への移行）が、ジンバブエ、コートジボワール、ケニアの3カ国のケースを中心に記述される。その経過は多様であり紆余曲折があるが、全体としては、政治の民主化と経済の自由化によって国民生活の安定化と豊かさの実現が達成されるという当初のシナリオが「多くの国でもはや実感をもって語られなくなっていること」（30ページ）が強調される。その理由として、民主化を支える基礎条件（学校教育、議会の調査討議能力など）の未充足、国民よりも外国に目を向けた政権にならざるを得ない要因、が指摘される。

第3章「独立は誰のために」では、アフリカが本来の意味で独立したかどうかが議論される。列強による植民地支配からの脱却（アフリカ人が国家元首になる）という意味では独立国であっても、国民の利益のために自らの国の方向を主体的に選び取れる

かどうかという尺度からみると「今日のアフリカは世界のどの地域に比べても限りなくグレーゾーン」（63ページ）にある国が多いと指摘、その例として資源大国コンゴ（旧ザイール）が取り上げられる。同国は「独立」したものの、国の富は、独立から半世紀経過後もなお国際的な仕組みによって管理され、国民に分配される制度が確立していないことが詳細に説明される。

第4章「ポスト・アパルトヘイトの今」では、南アフリカを特徴づけてきたアパルトヘイト（黒人を国内政治から遠ざけ白人が自らのプライドと特権を維持するための社会制度）とその帰趨が説明される。「人道に対する罪」とされたこの制度がどのように発生し、その後、世界大多数の国家や国際機関の反対に会い、そして1994年の選挙によって平和裡に廃止されたか、が記述される。そして制度廃止後も、総人口の8割を占める黒人の大半は依然として貧困層にあると指摘、これを変革しようとする黒人社会のダイナミズムに言及している。

第5章「冷戦後の戦争と平和」では、東西冷戦やアパルトヘイトの終焉にもかかわらず、アフリカでなお平和がもたらされていない現状とその理由が明らかにされる。現代アフリカにおける武力対立の特徴として（1）ほとんどが内戦である、（2）二者間ではなく群雄割拠型の紛争である、（3）明確な開戦と終戦がない、（4）反政府組織による闘争はその目的が不明瞭である、などを指摘している。このため、武力紛争の解決にとっては、紛争の原因を歴史的、文化的、経済的、社会的に突き止めてゆくことが必要だと指摘している。

以上5つの章ではアフリカの政治変動が扱われたが、これに続く3つの章では、主として経済の動きが記述され、それが2000年以降の世界経済の変動と関連させて考察される。すなわち第6章「飢えの構造」は、アフリカを特徴付ける飢餓の問題が扱われる。アフリカで人々が飢えるのは、作れない（旱魃や戦乱による）、買えない（購買力の不足による）、もらえない（戦闘などにより被災者が援助物資にアクセスできないことによる）、という3つの要因のいずれかあるいは幾つかが作用する時であり、それら

の相互作用が大量飢饉を生み出す、と整理している。このように複数要因が相互にからみ合っているため、外部から持ち込まれる「緑の革命」（投入増大や技術向上による増収）の推進によって飢餓の解消はできないと指摘している。そして、アフリカ人は自分たちの好きな食べ物を、自分たちの大地で、自分たちの力で作ってゆくという「食料主権の確立」が望ましい方向であり、それはまた参加型民主主義を成長させる契機になると示唆している。

第7章「ワシントン・コンセンサスから『北京コンセンサス』へ」では、経済体質の弱さに基づく累積債務問題の深刻化、そしてその対応策として国際金融機関から要請された「経済構造調整」の考え方とその帰結が説明される。ここでは、1980年初めから約20年間、米国ワシントンに本部のあるIMFと世界銀行が「南」の債務国にほぼ一律に採用させようとした市場原理主義を基本とする政策（通称ワシントン・コンセンサス）は「定食ダイエットメニュー」であり、アフリカ諸国の国民を豊かにする結果をもたらさなかったと強く批判している。その後2000年代に入ると、中国が資源獲得を目指してアフリカとの関係を急速に強化している実態が説明され、それはアフリカの国づくりの課題を先延ばしにしている可能性があるとして指摘している。

そして終章「人々を変えるアフリカ」では、アフリカを自立させ、発展させるための思想と方法が模索される。アフリカに対するこれまでの援助を振り返ると（1）「北」の専門家の処方箋の自信に満ちた無誤謬性、（2）「南」の人々の受け身の態度ないし存在感の薄さ、が特徴であり、このため援助は奏功しなかったと分析している（219ページ）。このため、新しい視点に立った処方箋（自分たちの言葉による基礎教育、地場産業育成による内発的内需拡大など）が必要であることが強調され、そうした動きの幾つかが紹介されている。

評者は、地域研究の有用性を従来から強調しており（岡部、2009）、また日本の国際的な政治経済戦略にも関心があるが、現代アフリカについてバランスのとれた知識はたいへん乏しかった。このため、

一読して本書の内容は非常に興味深く、また重要な書物である、というのが直感的な印象であった。

第1に、現代アフリカの立ち位置、課題、そして課題の先行きについて非常によい展望が得られる書物になっていることである。アフリカの多様性、多面性を知ることができるほか、この地域が持つダイナミズムもよく理解できる。ことに「北」対「南」という図式を一貫して援用することによって、「南」であるアフリカの姿がくっきりと、そして容易に理解できる。また政治的な側面（2章～5章）と経済的な側面（6章～7章）のバランスの良い扱いや、この地域の近現代史が巧みに織り込まれている点も見事といえるだろう。そして何よりも、著者の学識と長年にわたる現地調査が相まって書物に深みを与えている。要すれば、本書は現代アフリカについてたいへん良い入門書になっている。

第2に、上記第1点とも関連するが、本書は「地域研究」にとってそのあり方を示す良い見本になっていることである。地域研究とは、一般的にいえば一定地域を総合的に理解しようとする研究を指す。それが実りある成果をもたらすには3つの条件がある、と評者は考えている（岡部、2009：3章（1））。すなわち（1）当該地域についての幅広い知識を持っていること、（2）研究者として立脚すべき一つの学問分野（academic discipline）の素養を身に着けていること、（3）地域研究全体としての成果は総合的、学際的な観点から捉えられるべきこと、である。本書の著者はこれら3つの条件を満たす研究者であり、本書にはその成果が遺憾なく発揮されている。ちなみに本書では、著者が体験したエピソードや現地での写真なども適宜取り込まれており、それが読者に臨場感を与えている。

第3に、アフリカに対する著者の思いやりが全編ににじみ出ていることである。「南」から搾取し「南」を従属させようとする「北」、「南」の人権・自主性・文化を押しつぶそうとする「北」による各種の力（国際機関も含む）に対して強く反発する一方、南に対して温かい眼差しを注いでいる。「人は市民としては生まれぬ。尊厳への闘いを通じて市民になるのだ」（246ページ）という本書の締めくくりに言葉

は著者の心情を集約している。

一方、やや問題だと感じる点がないわけではない。第1に、「北」対「南」という図式を適用し、アフリカを一貫して「南」に位置づけるという枠組みの妥当性に関する疑問である。一般に二項対立図式は単純かつ明確な理解方法であり、有効性が高い場合も多い。確かに、2000年ごろまでの状況は、本書が示す通りこの枠組によって明快に理解できる。しかし、その場合でも、旧共産圏諸国の位置づけが今ひとつ明瞭でなく、また近年における新興国（中国、インド、ブラジルなど）の台頭をこの図式にはめ込んでアフリカを理解するのはやや無理があろう。南北モデルは諸刃の剣である。中国の食い込みが顕著となった2000年以降のアフリカを描くには、南北モデルに代わる何らかの新しいモデルを構築する必要があるのではないかと（ただし、これは本書に期待すべきことというよりも、著者の次の書物に期待したいことである）。

第2に、この地域に対する中国の積極的な進出は描かれているが、日本はどうか、日本としてどのような関わり方をすべきなのか、について全く言及がないことである。前書ではそうした記述があった（勝俣、1991：第7章「日本人とアフリカ人」）が本書ではそうした視点が見当たらない。著者は、それに関して何らかの理由で禁欲主義を貫いているように見えるが、読者としては日本が今後アフリカとどう関わって行くべきなのか、著者の洞察を是非聞きたいところである。

第3に、やや細かいことだが、ワシントン・コンセンサスという表現をもじって「北京コンセンサス」という表現（カッコつきの著者造語）を導入していることにはやや違和感があることである。ワシントン・コンセンサスとは、著者も指摘する通り、ワシントンに本部のあるIMFや世界銀行が発展途上国に融資をする場合にその国に課す条件（具体的には財政赤字の是正、金利自由化、国営企業の民営化、規制撤廃、貿易自由化など一連の市場原理主義的な政策処方箋）を指す。これに対して「北京コンセンサス」とは、中国の一方支配体制、あるいは中国の権威主義的な非西欧型発展モデルを指している（よ

うにみえる。201ページ、204ページ）。コンセンサスとは、複数主体間で何らかの共通理解があることを意味する用語であるから、「北京コンセンサス」という用語はそれに沿うとはいえない。むしろ、北京ドクトリン、あるいは北京ストラテジーというべきではないか。

本書は、新書という小さい本であるが、評者は大きく目を開かされた。現代アフリカにつき、その実像が臨場感をもって伝えられるとともに、そこにおいて国際政治経済の影響がいかに大きいかわかることができる貴重な文献といえよう。一つ付言するならば、慶應湘南キャンパス（SFC）においては、その創設時点で台頭が著しかった東アジアの研究と教育の体制をいち早く充実させることにより大きな成果を挙げたが、今後20年先を展望した場合、アフリカ地域の総合的な研究と教育を本格化することを検討してもよいのではないかと評者は考える。

引用文献

- 岡部 光明「国際学の発展—学際研究の悩みと強み—」、明治学院大学『国際学研究』、36号、2009年、p.1-28。
 <http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp_list2009.html>
 勝俣 誠『現代アフリカ入門』、岩波書店、岩波新書193、1991年。

〔受付日 2013. 6. 10〕

〔採録日 2013. 10. 10〕